
守護神

レックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守護神

【Nコード】

N4745W

【作者名】

レックス

【あらすじ】

女神と死神に殺された主人公、創造神の計らいで異世界へと転生。主人公最強系物語。

プロローグ

さまざまな書類や漫画、小説などが乱雑に置かれた部屋で男が飯を食っていた。飯と言ってもインスタントラーメンであり、料理と言えるものではない。男は、インスタントラーメンに醤油や卵、ミョウガなどを入れ自分なりのアレンジを楽しんでいた。

「ふう、今日のアレンジはうまくいったな。ミョウガがいい働きをしている……ん？　なんだ、この丸いのは？」

男は、インスタントラーメンの中に丸い砂糖の塊みたいなものが入っているのに気づいたが、気にせずそれを口に入れた。

「まあ、別に毒じゃないだろう。ふむ、甘さの中にしょっぱさがあり、ミョウガのアクセントがうまく効いているな」

思いのほか美味なその物体に満足していると、突然身体が浮き上がるような感覚に男は襲われた。徐々に男は、浮遊感が強くなっていき、最終的には男の身体は完全に室内に浮いてしまっていた。

「おいおい、どういうことだ？」

男が戸惑っていると、突然室内に髑髏の仮面をかぶったローブ姿の女が現れ、その右手に持った大鎌で男を切り裂いた。男は、自分に何が起こったのか理解する間もなく、その魂を室内から消失させた。

食べ残しのインスタントラーメンと魂を失った男の身体だけが、部屋に残されていた。男は、数日ののちに家に訪問した姉によって、

変わり果てたその姿を発見される。

男は、大学四年生。就職活動も終わり、学業も順調で、あとはアルバイトをしながら卒業を待つだけであった。彼の死に、友人、家族たちは例外なく涙を流した。

男の魂は現在、魂以外何も存在しない空間に存在していた。そこには、大小さまざまな形をした数え切れないほどの魂が浮遊していた。浮遊している魂は、混じり合うこともなく、ぶつかることもなかった。

停滞し、変わらぬその空間に変化が訪れる。光に包まれた、人間の女性に似た何かが降臨したのだ。その存在は、男の魂を大事そうに抱えると、その空間から男の魂と共に消失した。

白き空と黒き大地に赤き社、それだけが存在する場所。そこに人間の女性に似た何かは降臨した。その手には、優しげに男の魂が抱えられている。とそこに、今度は人間の男性とも女性とも見える何かが降臨した。そして、その存在が何事か唱えると男の魂が赤き光に包まれ、生前の姿を取り戻した。

「なにが、どうなってるんだ。俺は……死んだのか？　ここは、どこだ？」

男は、うわごとのように呟いた。そのつぶやきにこたえるように、髑髏の仮面をかぶり大鎌を持った女が降臨した。そして、女が答える。

「ええ、あなたは死んだ。ここは、神が集う場所の一つ」

男は、突然現れた女に驚くと何かに気づいたように目を見開く。そして、じっと女を見つめた後思い出す。この女によって、大鎌を振るわれ死んだ瞬間を。と同時に、怒りがわきあがり気づけば女につかみかかっていた。

「おい、お前！　どういうつもりだ！　俺を殺しやがって！」

しかし、男は怒りの中でもどこか冷静な部分で女が死神であると考えていた。そして、恐らくはこの女に非がないであろうとも考えていた。だが、誰かにあたらねば心が壊れてしまいそうだった。女は、掴みかかられたまま、無機質に男に話しかけた。

「私は、死神の一人。あなたの魂を刈り取ったのは私、そしてあなたを間接的に殺したのはそこにいる女神」

死神は、人間の女性の様な存在を指さしてそういった。指をさされた女神は、顔を歪ませ男に向かって頭を下げた。

「はい、私があなただの死の原因となった女神です」

続いて、その場に存在している最後の存在。人間の男性とも女性ともとれる存在が、一切表情も姿勢も変えずに口を開いた。

「我は、創造神。死神と女神の行った罪に対する謝罪と償いのためにここに来た」

男は、混乱した。死神、女神、創造神といきなり言われ現実味がなかったのだ。しかし本能的にある一つのことを理解した。理不尽な目に合っている。そして、男は神達に向かって言った。

「詳しく説明しろ」

創造神は、男に事のあらましを説明した。女神のミスで、男のインスタントラーメンに神の食物が紛れ込んでしまい、それを食した男の魂は一時的に幽体離脱したこと。幽体離脱した男の魂を浮遊霊と勘違いした死神が刈ってしまったこと。そして、創造神が過ちに気付いた時には男の死体は焼却されてしまっていたこと。そして、その謝罪をし、男に新たな生を記憶を残したまま授けるために今ここにいること。全てを聞き終わった男は、その場にへたり込み泣いた。

「はは、なんだよそれ……くそつ。これから、働いて社会に出るって時に」

男はしばらくの間泣き続け、神達はそれをじっと見つめていた。そして男は、何もかもがどうでもよくなり、創造神へと言った。

「もう……いいや。どうにでもしろよ、転生でも何でもお前らの好きにすればいい。俺はお前らを許すことはないし、お前らに何かしてもらいたくもない。だが、このまま死ぬんじゃ馬鹿らしい。転生させるんだろ？　じゃあ、させろ。話すことはもうないし、お前たちと話したくもない」

死神は俯き、女神は悲痛な顔をし、創造神は表情を変えなかったが身体を強くこわばらせていた。そして、創造神は男に話しかけた。

「行きたい世界や欲しいもの、能力はあるか？」

男は、はじめ答えるそぶりを見せなかったが、どこかうつろな眼をして、うわごとのように呟いた。

「……世界はどこでもいい。ペットが欲しい、俺が死ぬまでずっと一緒にてくれる奴が。あとは……生きがい欲しいな、才能とかもほしいかな。能力ね、くれるなら、なんでもいいや」

創造神は、真剣に男の声を聞いていた。一言も聞き洩らさぬように。死神や女神も一切聞き洩らさぬように聞いていた。創造神は、男がしゃべり終えたと判断して男に話しかけた。

「そうか、お前には使い魔とある程度の才能に加え私たちから1つづつ能力を与えよう」

男は、生気のない目で頷いた。

「創造神である我からは、創造錬金の力を」

「女神である私からは、条件結界の能力を」

「死神である私からは、死神の装備を与える」

男は、3人の手から放たれた赤、白、黒の何かが自分の身体に入るのを興味深そうに見ていた。そして、全ての光が身体に入った時、空間に門が現れた。男は、何も言うことなく、門へと向かいくぐった。

最後に聞こえたのは、神達の謝罪の言葉と男への激励の言葉だった。

「「「すまなかった、新たな生を往生できることを願う」」」

第一章 第一話

門をくぐった先は、森だった。男が空を見上げるとわずかに木々の間から光が漏れ、日中であることが分かる。彼の周囲には樹や草、土といったそこが森であることを示すもの以外何もなかった。彼は、深呼吸をすると、光のともっていなかった目に光を宿して森の探索を開始した。

「ふう、いつまでも沈んではいけないな」

男は周囲を注意深く見まわし、様々な音に警戒しながら森を進んでいた。彼の足が慣れない山道と緊張の連続によって悲鳴を上げ出したところ、彼は整備された道のようなものを見つけた。そこで彼は、1も2もなく道へと飛び出した。飛び出してしまった。

「ワォーン!!!!」

男の飛び出した先には、彼と同じほどの大きさを持った生物がいた。その生物は男に狼を彷彿とさせた。その生物は彼を発見するとすぐに雄叫びをあげ、襲いかかってきた。彼はとっさにしゃがみこんでその襲撃を回避したが、生物はすぐに振り返り再び襲いかかってきた。彼は恐怖のあまり、動けず、しかし声を上げることはできなかった。

「誰か助けてくれ!!!!」

男は、大声を上げることで恐怖を忘れられたのか、両腕をクロスさせることができた。生物は男の大声にも一切怯まず襲いかかってきている。男に生物が到達すると思われたその時、男の身体が赤く

光った。そして、男の身体の中から赤い何かが飛び出して生物へと衝突した。生物は、その衝撃で吹き飛ばされ樹にたたきつけられた。生物は衝撃で気絶したのか、死んだのか動かなくなった。

「な、何が起こったんだ……」

男の前には、全身を燃え上がらせた鳥の様なものが存在していた。そして、その鳥の様な存在はじっと男の眼を見つめていた。男は、その鳥の様なものに見つめられているうちにあることを思い出した。

「お前がもしかして、俺のペットなのか？」

その鳥の様なものは男の言葉を理解したかのように頷いた。男は、鳥の様なものが自分の味方なのだとしって落ち着き、鳥の様なものに問いかけた。

「そうか、名前はあるのか？」

鳥の様なものは首を横に振った。男は鳥の様なものに名がないと判断し、名を考えた。男はいくつかの名を呟きながら、そして最終的に鳥の様な物の名を決めた。

「鳥だから、フライ……いや、どうみてもフェニックス……ならば、不死鳥……いや、そうだな、朱雀にしよう！おい、お前の名は今から朱雀だ！よろしくな、朱雀！」

朱雀は、名を与えてもらったことが嬉しいのか羽を大きく広げ嘶いた。その声は美しく清らかで神秘的ですらあった。その後、しばらくすると朱雀を覆っていた炎が次第に弱まっていき、ついには消えた。朱雀はただの美しい赤い鳥となった。

「ほう、綺麗だな。さっきの姿もきれいだったが、ふむ、今の姿もいい」

男が、朱雀の姿に感心していると朱雀が突然大きな声で嘶いた。

男はその声に驚くが、朱雀の眼が男ではなく男の後ろを見ていることに気づき、振り返った。そこには、先ほどの生物と同じ生物が数匹よだれと唸り声を携えて存在していた。

「おいおい、やばくないか？　なあ、朱雀」

男は、朱雀を見らずに狼のようなものを見ながら呟いた。その言葉に反応するように、朱雀はその身に再び炎を纏い、狼の様なものたちへと襲いかかった。朱雀は瞬く間に数匹の狼の様なものたちを燃やし、吹き飛ばし討伐した。

「はは、すげえや朱雀」

男は、感嘆したようにそう言った。すると奴らを討伐し終えた朱雀が男の方を見て、大きく嘶いた。男は自分への何らかの意思表示だと考えたが、それは警告だった。男の後ろには1番初めに朱雀が倒したはずの狼の様なものが迫っていた。

第二話（前書き）

適当にかいてます

第二話

狼の様なものが男に到達する寸前、狼のようなものは斬撃によって両断された。両断されたそれは、二つのもの言わぬ物体となり地面に転がった。斬撃を放ったのは、杖を持った白髪の老婆だった。男は、いきなりの事態に混乱し、ただただ両断された死体と老婆を交互に見ていた。朱雀は、老婆と男の間にすぐさま割って入り、じっと老婆を見つめた。その姿は、主を守る騎士のようであった。

「おやおや、赤い鳥は私を警戒しているようだねえ。まあ、いいさ。ところで、坊やこんなところで何をしているんだい？　ここは、武器一つ持たない一般人が来るような場所じゃないんだがねえ」

男は、老婆の言葉に正気を取り戻し老婆をじっと見つめた。そして、何かを言おうとしたがやめ、しばらくうねった後老婆に対して口を開いた。

「お、俺は……その……迷子って奴なんだ。気づいたらペットの朱雀、ああ、この赤い鳥なんだけどこいつとここにいて、どれくらいかわからないが数時間ぐらいここをさまよってた」

男の言葉を聞き、老婆は眼を光らせた。そして何事かを感じ取ったのか、片眉を跳ね上げた。杖をつきながら男に近づいた老婆は、威嚇する朱雀をなだめ、男に優しく話しかけた。

「ふむ、まあここは危険じゃし、とりあえずは家にでもきたらええ。見たところ、お主弱そうじゃし、危険もなさそうじゃからな。ああ、もちろん朱雀と言ったかな、ペットも連れてくるがいい。そのグレイウルフの血に引かれて魔物が集まってきてもかなわんからな。さ、

そうときまったらすぐに移動じゃ」

「え、あ、はい！」

こうして男は老婆の後をついていった。出発する際、老婆は男の背後を見つめた。そこにはグレイウルフ数十匹の群れがいたが、老婆が一睨みするとみな逃げて行った。グレイウルフの存在に気づいていたのは、老婆だけだった。

歩くこと数十分、二人と一匹は老婆の家についた。森の中でもひとときわ目立つ大きな木、その隣に老婆は住んでいた。老婆の家は、小さな木製の小屋であり、大きさ自体はあまり広くなかったが、中に入るといくつも置かれた槍や剣、刀に斧、弓にボウガンなどが存在感を放っていた。一方で、家の中央に存在する炬燵やあったかそうなベッドが生活感を醸し出していた。

「おれ、何を棒としておる坊主、そこに座らぬか。おお、鳥はこの布で足をふきなさい」

老婆の家につき、ゆっくりと炬燵に入った男は足をふいた朱雀の肩に乗せほっと一息ついた。その様子を見た老婆は、ニコリと笑うと戸棚から食器と菓子を出して男と朱雀に与えた。男と朱雀はは、出されるとすぐに口に入れ水までも要求した。老婆は、苦笑しながらもそれをすぐに用意した。

「つつばあ、うまい！　ありがとな、ばあさん」

「コーコー」

水を飲んだ男と朱雀は二人して老婆にお礼を言った。お礼を聞い

た老婆は、人のよさそうな笑みを浮かべるとうなずいた。そして、ゆっくりと腰を下ろし、大きく深呼吸すると男に話し始めた。

「よいよい。さて、人心地ついたみたいなのでぼちぼちお話でもしようかね。坊主、お前さん名前は何というんだい？」

男はいまさらながら名乗ってないことに気づき、老婆に頭を座げつつ答えた。

「あつ、すみません！ えっと、俺の名前はハナヤマ・レイキって言います。で、こいつはペットの朱雀です。ほら、あいさつしな」

「コーコー」

「ほうほう、ハナヤマ・レイキとな。その響きからするとお前さんも大和の出かい？」

「えっ、あゝまゝ、ある意味大和っていうか。その、出身地はちょっと事情があつて言えないっていうか……もう戻れなくて」

「そうかい、そうかい。まあ、無理に言わんでええ。年なんか聞いでもいいかい？」

「あ、気を遣わせてしまつてすみません。年は21歳です。まあ、学生でした」

「でした？ まあ、ええか。じゃあ、何であんなところに一人で居った？」

「話せば長いんですが、簡単に言えば拉致られて、放り出されたのがここらへんだったってことすね」

「なんじゃ、ずいぶんと物騒な話を簡単にするのう」

「あゝ、まゝ、これもいろいろ事情があつて、向こうさんに悪気はなかったっていうか、むしろ善意っていうか、すいません、これ以上はちよつと」

「ふむ、なぞの多い坊主じゃて。して、行くあてなどあるんか？」

「え、いやないですね。知人一人いません、朱雀を除けば天涯孤独ですね」

「そうか、ならここに住んでよいぞ」

「え、ほんとですか!？」

「ああ、正し条件付きじゃ」

「え、あ、そうですね。それで、条件って……」

「なあに、お前さんには家事を手伝ってもらふのとある技術を修めてほしいのじゃ」

「ある技術……ですか？」

「どうかの？」

「えっと、できるかわかりませんが、よろしく願います！」

「ふむ、では今日からよろしくの」

「はい！よろしくお願いします」

「コーコー！」

第3話（前書き）

お久しぶりです。異世界者の更新予定はありません。何を書けばいいのか・・・

第3話

青年が老婆のもとで暮らすようになってから3年の月日がたった。青年は毎日老婆の身の回りの世話や家事、雑用などを行っており、その合間に老婆からある技術を仕込まれている。ある技術とは、老婆が修めている武術である。剣術と徒手空拳を基本とし魔力によって肉体を強化し戦うものであり、魔力を剣撃や拳撃として飛ばす術も存在する。青年レイキは、雑用を一通り終わらせると今日も老婆の訓練を受ける為彼女の元へと向かった。

「師匠牧割り終えました」

青年が老婆の元へ向かうと、そこには縁側でお茶を飲みながら朱雀とじゃれ合っている彼女の姿があった。青年は自分の相棒であるはずの朱雀が自分を手伝いもせずのうのうと寛いでいるのを見て怒り、怨念のこもった視線を投げかけるが、朱雀は一向に青年を振り返ることはなかった。朱雀はその時顔を青くして震えていたとは、老婆の後日談である。老婆はそんな青年の様子を面白そうに見つめながら茶を飲み干すと、おもむろに立ちあがった。青年は老婆の様子を見てすぐに所定の位置につき構えをとる。

「そうか、じゃあ始めるとしようかの」

老婆は、立てかけてある杖を手にとるとそれを弄びながら青年の正面へと向かった。そして、所定の位置につくと杖を弄った。すると杖は剣へとその姿を変える。仕込み刀である。老婆はチラリと青年を見ると言った。

「行くぞ？」

青年は、右足を強く踏み込み老婆との距離を一気に詰める。老婆はあわてることもなく相對する。青年は老婆の間合い一步手前にて刀を鞘から抜き放つ。目にもとまらぬ超速の抜刀術。しかしそれは老婆のはいた草履により止められる。いや、踏みとめられる。老婆は神速の突きを青年に放つが青年は刀を離し、老婆の刀に手を添えてその軌道を反らす。そこから刀を使う老婆と無手の青年との戦いが始まった。

「くっ、流石にきついっ!」

老婆の無数の突きを捌き、避け、反らす。しかし、一撃でも当たればそこで終了。青年は極限の集中力を発揮しながらも、徐々に追い詰められていった。一方の老婆は、その外見からは想像することのできないタフさを発揮しかれこれ20分もの間突きを放ち続けている。このまま永遠にこの勝負が続くかに思われたが、老婆の一言により戦況は一変する。

「そろそろ、魔力を纏おうかの?」

瞬間老婆の刀と身体から緑色の光が放たれ、一方の青年からも緑色の光が放たれる。老婆と青年の動きがスピードを増し、二人の戦いは一層苛烈さを増していった。ここにきて青年は老婆の攻撃に立てられなくなり、一步二歩と後退を始める。老婆はそれを好機と見て、今までで一番早い突きを放つ。その瞬間青年の動きが一気に加速する。

「この時を待っていた!!!」

青年は伸び切った老婆のをつかむとそのまま老婆の懐に入るよう

に回転する。そして、肘を老婆の胸にあてようとして老婆の掌底を腹にくらった。後方10メートル程吹き飛び木々を3本へし折って、4本目で止まる。そこへ老婆の投げた杖剣が襲い来る。青年はその剣を首を捻って避けると回転しながら立ち上がり、とびかかってかかと落としを放ってきた老婆を弾き飛ばす。くるくると着地した老婆は、一寸の間も置かず飛びかかってくる。青年は回転しながら老婆と打ち合うが数号打ち合った結果上に弾き飛ばされた。青年は宙廻りをする木を足場として老婆に突っ込んだ。老婆は青年の首を狙い手刀を放つが、青年は回転しながら肘でそれを防ぐ。地面に両手をつくると前方宙廻りを行い態勢を整えて着地した。

「ふう、やはりまだ勝てませんね」

息を整えた青年は杖をつきながら歩く老婆に向かってそういった。しかし、老婆は不敵に笑うと青年の言葉を否定するように言った。

「何を言っておるか、わしと引き分けるだけでもすごいことなんじやぞ。まったく、三年でこのわしにと互角にやりあえるようになるとは……生意気な童子じゃて。まあ、剣術はまだまだじゃがな」

「そ、それを言われると何にも言えません」

青年は照れたように頭をかいた。老婆は青年を剣術面で否定こそしたものの十分な実力をつけているとも感じていた。そして、ほぼ頭打ちであるとも。老婆から見て青年の徒手空拳は自分以上であり、剣術は一流に毛が生えた程度であった。また、彼に足りないのは経験だとも思っていた。老婆は決意すると言った。

「レイキ、剣術の奥義と徒手空拳の奥義を明日見せる。それを見たら、主は出て行け」

青年は、言葉を聞くと目を見開いた。しかし、しばらくするとそつと目を伏せ言った。

「……はい、了解しました」

第4話く奥義と旅立ちく（前書き）

サブタイトルの付け方を思案中

第4話〈奥義と旅立ち〉

老婆に与えられた一室、そこで青年はペットである朱雀と話し込んでいた。それはもちろん老婆に言われたことが原因であり、明日以降どのような暮らし、何を目的にするかということだった。

「朱雀、お前は思う？俺は、師匠から聞いたハンターってのになろうと思ってるんだが」

朱雀はしゃべることができず、念話もできないので体を使って意志を示す。朱雀は同意するように頷き、青年の肩に乗るとその身を青年にこすりつけた。

「そうか、お前も賛成か。だよな、他にできることもないしそれが妥当か……」

青年は朱雀を撫でながら、ゆっくりしていると、ドアの外に気配を感じた。その気配は長年慣れ親しんだものでこの世界で唯一の青年の知り合いであった。気配の主である老婆はドアの外から青年に声をかける。

「レイキ、話がある。居間に来なさい」

なぜか老婆の声はいつもより若々しく綺麗であった。青年はその声を聞くと驚きよりもいやな予感がしてならなかった。その感覚は今まで一度も味わったことがなく、しかし全てを失った3年前に近いものであるとも感じた。孤独、絶望、恐怖これらの感情が一斉に青年を襲った。だが、青年は気力でそれらの感情を抑え込み居間へ朱雀とともに向かった。

「来たようですねレイキ、言いたいことは色々あるでしょうが今は黙って聞きなさい」

青年は言われた通り黙って席につき、朱雀も慌てることは無かった。青年の向かい側には年の頃20代半ば程の美女が座っており、首元には一部が欠けた円の刺青が存在していた。彼女はまぎれもなく昨日まで老婆であったが、今現在は美女になっている。

「さて、今日あなたに奥義を見せます。剣術の奥義と徒手空拳の奥義です。剣術は無理でしょうが、徒手空拳の奥義ならばあなたにも会得することができるとでしょう。奥義を見たらすぐにここを去りなさい。10年間はここに帰ってくることを許しません。理解しましたか？」

青年は彼女の言葉一つ一つをかみしめながら頷いた。彼女は青年の反応をみると満足そうに微笑み頷いた。そして、徐にバックを取り出し青年の前に置く。

「この中にはお金と宝石、私があなたの身分を証明するという書類と免許皆伝の証である首飾りが入っています。それと何日かは生きていける装備と食料もです。奥義を見たらすぐにこれを持って出て行くように。それと、今の私のこの姿は奥義によるものですがこの奥義をあなたに教えるつもりはありません」

青年は最後の言葉を聞き何かを察したが、じっと彼女を見つめるだけで特になにを言うこともなかった。彼女はその目をまっすぐに見つめ返すと席を立ち壁に立てかけてあった刀をとった。そして、青年を振り返ることなく外へと出ていく。青年もそのあとを追いつへ出る。

外へ出ると彼女は青年に背を向けて、広大な森の奥にそびえ立つ山を凝視していた。青年が動きを止めると、彼女にしては珍しく構えをとった。とった構えは居合の構え。青年が最も得意とする構えでもある。彼女は構えを取ったまま、振り返ることなく青年に言った。

「これが剣術奥義……断世断空……です」

カチンと居合抜きを行い刀を鞘に納めるときに鳴る音が辺り一帯に響く。その音が山にぶつかり、山彦として返ってきたとき彼女の遙か前方にある山が滑り落ちた。辺り一帯に轟音が響き、山の上方が地面に落ちた衝撃で砂塵が巻き起こる。地面も揺れる、まるで地震が起きたように。森全体からあらゆる生物の悲鳴が聞こえるようでもあった。

「なっ……そんな、でたらめな。山を切ったとでも言うの……かっ！？」

青年は滅多に上げることのない驚きの声を出し、何度も彼女と切れた山を見比べる。そこにあるのは静かにたたずむ彼女と半分になった山、そして荒れ果てた森だけであった。彼女は青年の言葉を意にかえすことなく、振り返ると静かに青年に言った。振り返った彼女の首元にある円は心なしか最初に見たときよりも欠けている部分が大きいように見えた。

「そしてこれが徒手空拳奥義……無限廻衝……です」

彼女は刀をそっと地面に置き、消えた。それとほぼ同時に青年の周りにて無数の打撃音が響きわたり始める。また、青年の周りには

砂嵐のようなものが起き始め、地面は円状に抉り取られていく。そして、青年の体は小刻みに震えている、まるであらゆる方面あらゆる角度から攻撃を受けているように。永遠に続くかと思われたその現象は青年が上空に打ち上げられたことにより終焉を迎える。

「朱雀、あなたはバックとこの子を手を連れて下山しなさい。レイキあなたに伝えるべきものはすべて伝えました、では達者で。あなたとの3年間は有意義なものでした」

彼女の言葉が終ると同時に青年は地面へと鈍い音を立てて墜落した。朱雀はそっと青年に近づくと涙を垂らす。その涙は青年にかかるたびに彼を癒していく。彼女はそんな一匹と一人の様子をみると一人家の中へと入って行った。首元の円はさらに欠けていた。

朱雀は青年の傷を癒し終わると気絶したまま彼とバックを抱えて下山していった。しかし、半日ほどたった時突然青年がうわごとのようにつぶやいた。

「す……ざ……く……し、しよ……う……を……い……か……せ……」

朱雀は青年に言葉を聞くとすぐに彼を森の開けたところに置きどこかへ飛び立っていった。青年はその姿が見えていたのかわからないが、安心したようにそっと眠った。

第5話く目覚めと出会い

朱雀に置いて行かれた青年は森の中で一人静かに気絶している。着ている服はぼろぼろで、砂にまみれているがその肌に一切の傷はない。しかし、体力でも外傷でもないどこかに確実にダメージを負っていた。それを物語るように彼の顔は苦しげに歪んでいる。

「はあ……はあ……はあ……」

森の中を一人の少女が疾走する。彼女の的う服はただのぼろ布といても過言ではないほどに擦り切れ汚れていた。もちろん靴などは履いていない。蒼色の髪を揺らし、蒼色の眼に光を宿らせて少女はひたすらに走る。自分を追ってくる男たちから逃れるために。

「くそっ、どこ行きやがったあのガキ……」

「魔女は魔法さえ使えなきゃただのガキだって油断してたぜ」

「黙って探せ、見つけないと俺たちがお頭に殺されちゃう」

少女がいる場所から少し離れた場所を三人の男たちが駆け回る。小太りで醜惡な顔をした男とやせ細った長身の男は少女を逃がしてしまった焦りから口汚く言葉を漏らす、スキンヘッドで筋肉隆々の巨漢がそれを嗜める。ふと、小太りの男が太陽の光によって反射した蒼色の光を見つける。

「兄貴！いま、ガキの髪らしきものがあっちの方に……」

「よし、行くぞ……」

少女は必死に逃げていたが、いやな予感がして後ろを振り返る。するとぎりぎり目視できる距離に自分を追ってきている男達がいた。彼らは確実に少女を目指して走ってくる。スピードは速く、少女が追いつかれるのは時間の問題だった。男たちが少女に追いつこうとしたとき、必死に走る少女は自分が何かを踏んだことに気づかない。何かは、鈍く声を上げた。

「ぐえっ」

踏まれた何かは、ぼろぼろの服を着た青年だった。しかし不幸なことに少女は踏んだことに気づかず青年に反応することもない。そして、少女を追ってくる男たちの進路上に青年はいる。男たちも命がかかっているので必死である。その結果、三人の男たちは綺麗に青年を順々に踏んで行った。

「ぐっ、がつ、おえっ……」

青年を踏んだのは軽い少女だけでなく重い男たち、青年は三人目の男に踏まれたところで完璧に意識を覚醒し飛び起きる。男たちが走り去った後に。そして、走り去る男たちに向かって叫ぶ。

[illegible]

背後から聞こえた大声に驚いた男達と少女は一斉に後ろを振り返る。そこには漆黒の刀を携え、般若のごとき形相をした青年がいた。刀を持ち、明らかに殺気を放つ青年に警戒し男たちと少女は立ち止まった。後にこのときのことを少女は語る。悪魔が現れたかと思った。

「てめえら、人をさんざん踏みつけやがって……覚悟しろ」

怒れる青年はゆっくりと男たちへと近づいていく。男たちは青年の言っていることに全く心当たりがなかったが、少女に逃げられる可能性があったので、即座に青年を殺すことに決定する。その判断が誤りとは気づかずに。

「ふん、何のことか知らんが面倒だ……死ね。土属性魔法チェンジボディ」

スキンヘッドの男が何事かをつぶやくと彼の右手が茶色の光に包まれ、岩のようになった。青年はその様子をただ黙ってみていたが、一言言った。

「それはつまり、戦闘の意思ありと受け取っていいんだな？」

スキンヘッドの男は答えることも表情を変えることもなく、淡々と青年との距離を詰める。そして右手を振り上げた。青年は刀を構えることさえしない。スキンヘッドの男が放つ右ストレートが青年に到達する瞬間、黒き閃光がスキンヘッドの男の右腕付け根の部分に走った。

「斬らないと俺が殴り殺されていたんでな、勘弁しろ」

スキンヘッドの男の右腕は付け根から斬り落とされていた。彼はそれを理解した瞬間魔法で切り落とされた部分を硬化し、二人の男に言った。

「……引くぞ、こいつはやばい。俺のこの状態を見ればお頭も俺たちを殺しはしないはず。なあ、このガキはあんたにやるから、見逃してくれないか？」

青年は男たちが何を言っているのか一切わからなかったが、彼らの後ろから猛スピードで薄汚れた服を着た少女が青年の元に駆け寄ってきたため反射的に答えた。

「行け、二度はないぞ」

三人の男はゆっくりと歩き去って行った。残された青年と少女は男たちが見えなくなるとごく自然に目を合わせた。質問したのは青年。

「で、お前はなんなんだ？ 奴隷か？」

少女は青年の眼をじっと見たまま、しかし質問に答えることはない。少女は強い意思を感じさせる眼の中に恐怖と不安の色も映し出していた。青年はそれに気づいていたから答えない少女をせかすこともなく、責めることもなかった。少女はそんな青年の態度を見て決心がついたのかゆっくりと話し始めた。

「私は5日前村長によって奴隷商に売られました。15日前両親がやはり病で死んだから。それで、奴隷商人は私を買った後、私が付けている封印具を見て私が魔女だと感じました。それから丁重に扱われたけど、商人は私にお前は俺に莫大な富をもたらせてくれるから今は大切に扱ってやると言いました。それで、昨日商人はあいつらに襲われて、さっきまであいつらのところにつかまっていた。で、あいつらは私が封印具を付けていると油断していたから、なんとか隙を見て逃げ出すことができました。私はまだ奴隷の刻印を押されていますので、奴隷じゃないです」

少女は話し終わると無表情で涙を流した。青年はその姿を黙って

みていたが、徐に少女に近づくとしっかりと彼女を抱きしめた。そして、彼女の長い髪を撫でながらやさしく言った。

「そうか、お前は一人なのか。……俺も一人なんだ。これも何かの縁だろ、お前が一人前になるまで俺がしっかりと面倒見てやるよ」

少女は今度は青年の胸の中で声を上げて泣いた。青年は泣きやむまですっと少女を撫で続けていた。少女が泣きやむころには、すっかり日が沈み辺りは真っ暗になっていた。

泣きはらした顔の少女をやさしく見ながら青年は声をかけた。少女は恥ずかしがりながらもしっかりと答えた。

「大丈夫か？」

「……はい」

青年は少女が完璧に落ち着いたと理解し、気になっていたことを問いかけた。

「ところでお前、名前は？俺はレイキ・ハナヤマ、24才だ」

青年の言葉にびっくりした少女は、問いに答えることも忘れて彼に詰め寄る。

「え！？24……18歳くらいにしか見えませんよ！？」

青年は苦笑しながら、答えともいえない答えを返した。

「ああ、まあ。いろいろ事情があるんだよ。三年くらい前にちよっ

とあってな」

実際、彼の外見は少女の言うとおり彼が18歳のころのものだった。彼が若返っているのは秘術でもなんでもなく、この世界に来た際に何故か起こった出来事だった。彼自身このことに気付いたのは、異世界にきて2年ほどたった時にたまたま老婆の部屋に置いてあった鏡を見たときであった。もちろん不老ではなく、それは老婆が証明している。

少女は青年の答えに思うことはあったものの、それ以降特に突っ込むこともなく、自身の自己紹介を始めた。青年はそんな少女の態度に少し好感を抱いた。

「あ、そうですか。えっと、私はフェリス・レルクインです。年齢は12歳です」

青年は答えを聞き、西欧系の顔立ちをした少女を見て驚く。というのも彼女は確かに少女という見た目をしているが、もうずいぶんと体の凹凸ははっきりとしており14歳前後に見えるからである。

「12歳か、ずいぶんと大人びて見えるな」

少女は青年の返しを予想していたのか、にっこりと愛想のよい笑顔で答える。そこには先ほどの無表情で泣いていた少女などいなかった。

「よく言われます。でも、ほんとに12歳ですよ」

青年は少女のその屈託のない笑顔を見て思う。偶然だったが、助けてよかった。この子を一人前に育てることを俺の生きがいにしよ

第6話 冒険の街アディオス

2人は現在冒険の街アディオスに滞在していた。冒険の街アディオスはあらゆる国、組織、宗教から独立しておりどのような権力も通用しない。頼りになるものは自身の力だけ。街を納めているのは冒険ギルドで、冒険者たちはランクに応じてギルドへと定期的に上納金を払っている。そうしてこの街は成り立っている。上記のような関係上、この街には無法者や異端者、差別を受けたものなど様々な事情を持つものが住んでいる。その為、魔女であるフェリスにとっても暮らしやすい場所なのだ。

「さて、フェリス留守番頼むぞ。家事の方を頼む」

「はい、旦那様。御帰りをお待ちしております」

レイキはアディオスにつくとすぐにギルドへと登録を済ませ滞在10日目となる今まで毎日依頼をこなしている。今日も嫌いをこなすためギルドへ赴く。一方のフェリスは、拙いながらも一生懸命家事をしている。と言っても、二人が滞在しているのは小さな民宿であるため家事は女将がしてしまうのだが、フェリスはそれを手伝っているのだ。

「あらあら、フェリスちゃんもうすっかりメイドだねえ」

「あ、女将さん。今日も一日よろしくお願いします」

「ああ、よろしくね。じゃあまずは洗濯から済ましてしましようか」

「はい！」

フェリスは恰幅の良い獣人族の女将と一緒に家事へとりかかった。その身には何故かわいらしいメイド服をまとうており、いささか露出過多なものへと改造されていた。成長豊かなフェリス自身と相まって、働くメイド服の彼女は宿の客皆に気に入られていた。

「ふおふおお、今日もフェリスちゃんはかわいいのう」

「いや、フェリスちゃんを見るだけで日ごろの疲れが吹き飛ぶようだぜ」

「できれば、僕のお、お嫁さんに……はあはあ」

一部フェリスに身の危険を感じさせるようなものもいるが、他の客によってそういうものは袋だたきにあっている。今現在のフェリスの立ち位置は、民宿の看板娘である。

ところ変わって、ここはギルドの受付。美人で評判な受付嬢のエルフの列を避けてレイキは若い人間の男の列へと並んだ。受付嬢の列よりもすんなり順番が回ってきたレイキはあらかじめ掲示板から取っておいた依頼書を受付の男に渡す。

「はい、Fランク依頼の薬草採取ですね。期限は今日の日没までです。あ、この依頼を達成されるとレイキ様はFランク依頼達成件数50を超えますのでEランクとなります。では、がんばってください」

レイキは黙って依頼書を受け取ると、足早にギルドの建物を出発し薬草の採取場所である付近の森へと向かった。道中襲いかかってきた数匹の魔物を倒し、証明部位と体内の魔石をとったレイキは森

に到着するとすぐに薬草を見つけた。

「ふむ、結構早く見つかったな。さっさと、依頼達成してEランクに上がるか。しかし、依頼達成するより魔物討伐して証明部位と魔石売った方がもうかるのはFランクの辛いところだな……」

レイキは1人愚痴りながら街へと急いだ。レイキが街へとつき、ギルドの建物へ向かうと何やら建物の前が騒がしかった。レイキは近くの人間を捕まえ事情を聴いた。

「おい、あんたどうしたんだ？」

「ん？ いやな、特別昇格大会のポスターが貼り出されたんだよ！ この大会で8位以内になればあらゆる条件を無視して一気にBランクになれるのさ！！！！4位以内になった日にゃAランクだぜ！！！！」

「そうか、ありがとう」

レイキは事情を聴くと、依頼達成の報告と報酬を受け取りに受付へと足を運んだ。ギルドのロビーも大会の話題でもちきりで、あちこちで興奮した様子の冒険者を目にすることができた。

「依頼を達成したんだが、確認と報酬を頼む。ああ、あと魔物の部位鑑定と魔石の買い取りを」

「了解しました。いやしかし、早いですね。ギルドのシステム上に実力があるうとFランクから順にランクアップしなければならぬのですが、本当にレイキ様がFランクなのが残念です。あ、表のポスター見られました？」

「ああ、昇格大会だったか？Fランクの俺でも出られるのか？」

「いえ、出場資格は大会3日前にEランク以上であることなんです
が、はい、たった今依頼達成を確認しましたので、レイキ様はEラ
ンクに昇格です。という事で1ヶ月後の大会に出ることができま
すよ？はいこれ、報酬です。ご確認ください」

「確認した。そうか……受付はいつからだ？」

「来週からここの受付で始まりますよ」

「そうか、多分出ると思う。あと、すぐにEランクの依頼を受けた
いんだができるか？」

「はい、可能ですよ」

レイキはその日3つのEランクの依頼を達成し宿へと戻った。宿
には多くの客がおり、その数はフェリスが働く前の3倍近くにまで
増えていた。宿に帰ったレイキを見つけたフェリスは彼に近寄って
丁寧にお辞儀をした。

「おかえりなさいませ、旦那さま」

「ああ、だだいま。何事もなかったか？」

「はい」

二人のやり取りを見て多くのものは顔を緩めていたが、一部嫉妬
ややかみの声もあった。ロリコンとレイキをバカにしたものはそ
の場にいた客全員から袋だたきにあい宿の外へ放り出された。フェ

リスはレイキが帰ったことで女将に許しを得て仕事を上がり、レイキとともに部屋へと帰った。

第7話 買い物（前書き）

わかりにくいと思うので魔力量の説明をあとがきにしています

第7話 買い物

レイキはEランクに上がった翌日フェリスと二人で街を散策していた。フェリスが何故か常にメイド服を着ているせいでレイキへいぶかしげな視線が向けられるが、レイキはそれをスルーし様々な売店を見て回った。そんな売店のうちの1つでレイキにとって懐かしいものが売られていた。思わずレイキは店主に声をかける。

「なあ、店主その服ってさ」

声をかけられた店主はメイド服のフェリスをちらりと見たがすぐに商売用の笑顔を張り付け、手をもみレイキに応対した。レイキが見つけたのは、前世で有名な体操着でなぜかブルマだった。

「お、旦那お目が高いですね！これは数代前の勇者様が発案した体操服というもので、運動するときなんかに女子供が着るものです。しかし、どうも大人の女たちから不人気だったらしくすたれちまっただんです。これは、どっかの貴族さまが観賞用に取っておいたそうなんです。飽きたそうで、譲り受けたんですよ。どうです？そちらのメイドさんなんかじゃサイズもそう違わないから似合うと思うんですが」

店主はフェリスを見て、ずっと体操服をレイキに差し出した。レイキがちらりとフェリスを見ると若干ものほしそうな顔をしており、彼自身も外人の着る体操服とブルマに興味があったので購入することにした。しかし、値切りもせずに買うのはバカらしく感じたので店主に交渉してみた。

「ふむ、まあ買わんでもないがちと高いな。どうだ、そこの長い靴

下と合わせて2500でどうだ？」

レイキは眼の端に移った白のハイソックスらしきものをできるだけ安く手に入れるべく店主と交渉を始める。

「うゝむ、確かに体操服もこの長い靴下もあまり売れやせんからねえ。あ！そうだ、旦那これを気にいったってことはこれなんかどうですか？」

店主は何やら閃いたようで、荷物入れの中から紺色の物体を取り出した。それはまぎれもなくレイキが前世で見たことがあるもの。スクール水着であった。店主の話で、スクール水着も数代前の勇者の発案であることを知り、心の中でその勇者に対しサムズアップをするレイキであった。

「これは、なんだ？」

レイキは知ってはいたが、交渉のためにも知らないふりをした。怪訝な顔をしてさも興味の無いような顔をするが、心の中はカーニバルである。店主はそんなレイキの胸の内も知れず必死にレイキに説明し興味を持たせようとする。

「これは海で泳ぐ際に着るものでございまして、大変伸縮性に優れ着心地もいいものでございます。こちらも大人の女性が恥ずかしいなどと言ってすたれてしまったものではございますが、どうでしょう旦那、このスクール水着と体操服に長靴下をつけまして4500でお買いになりますか？」

レイキは、買うことに決めると値切り始めた。金を稼ぎ始めて10日ほど、フェリスのおかげでだいぶお金が節約できているとは

いえ懷事情は裕福とは言えない。やっとEランクになりはしたが、いまだEランクとしては1日ほどこしか働いておらず、今稼いだお金はDランク依頼で得たものがほとんど。無駄遣いはできない。

「3000だな、体操服はいいとしてもスクール水着といったか。魅力をあまり感じないな。厄介ばらいをしたいだけだろう?」

「では、4200で」

「3300だ」

「3800これ以上は……」

「3500決まりでいいな?」

「くっ……わかりやした」

「もらっていく」

レイキは品物を受け取ると、フェリスを連れ颯爽と出店を後にした。残ったのはひきつった笑いを浮かべながら手を振る店主の姿だけであった。そのあとも様々な出店を回っては食べ物を買って買い食いをしたり、冷やかすだけ冷やかして何も買わずに出たり、楽しい時間をフェリスと過ごしたレイキだったが、ふとある思いを抱いて果物を食べているフェリスに話しかけた。

「そういえば、フェリスお前今魔法使えるのか?」

「いえ、使えません。無理に使おうとすれば封印を壊せますが、莫大な魔力が漏れ出て大変なことになるので……」

「俺がもう少し稼ぐようになったら、高級な封印具を買って微調整しながら慣らしたいけるんだろうが……。今はまだそんな金ないからな。ということは、何か自衛のための武器を買ってやらなければな」

レイキとフェリスがそんな話をしていると怪しげな出店がレイキの目に映った。その出店には、様々な種類のナイフが飾ってあり独特な雰囲気が出た。レイキは興味のひかれるままにその出店に向かいナイフを物色した。フェリスは黙ってレイキの後ろに控えている。

「ほう……魔具のナイフもあるのか。ん、店主これはどういう効果をもってるんだ？」

レイキは12本のナイフが、それ専用のサスペンダーに入っているものを指して店主に尋ねた。ナイフの刃の部分に何かしらの刻印が彫られていたのが気になったのだ。

「それは、魔力を込めることで自身の属性をそのナイフに付加させることができます。また、そのナイフに血を垂らし、その後1日中身体のだどこかに触れらせておくとその契約することができます。契約した後は刃の部分が契約者の属性と同じ色になります。12本のナイフそれぞれに名をつけるとよいですよ。契約した後ならば対象のナイフがどこにあらうと名を呼べば自分の手元に召喚することができます。また、このナイフは契約した主人の魔力を食って自己再生します」

「ものすごい一品だな。いくらだ？」

「12本で12万です」

「なっ！？めちゃくちゃ安いじゃないか！？……そうか、デメリツトがあるんだな？それとも呪いか？」

「12本のナイフは毎日契約者から魔力を食らうのです。たとえ完璧な状態だとしても。その量が問題なのです……その量は、1本につき中級魔法使い1人分。特級魔法使いでもない限り、魔力を吸いつくされ死にいたりします。特級魔法使いだとしても12本すべてと契約すれば回復が追いつかず2日目か3日目で死に至ります」

「……魔力がいくらあれば12本と契約しても死なないんだ？」

「毎日吸われる魔力量以上を回復できればよいのです。一般的に毎日回復する魔力量は総魔力量の1割でありますから、総魔力量が中級魔法使いの120倍あればよいのです。中級魔法使いは平均500MPを持っておりますからその120倍である60000MPを持っておればよいのです。ただし、一切魔法を使わなかった場合ですが」

「特級の6倍か……わかった、これをもらおう」

「本気ですか？一本でも特級魔法使いでないと扱いきれませんよ？」

「ああ、大丈夫だ。12万でいいな？」

「はい、それでいいです。……無謀なあなたにサービスです、このミスリルナイフ12本セットを差し上げます。これは大気中の魔力を吸って自己再生します。魔法分解効果もあります。普通に買えば1200万はするのですが、差し上げます」

「いいのかよ？」

「はい、あなたたちを気にいりました。死なないでくださいね」

「了解。ありがとう」

第7話 買い物（後書き）

下級	中級	上級	特級	魔女
1 0 0	5 0 0	1 0 0 0	0 0 1 万	1 0 0 万

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4745w/>

守護神

2012年1月7日01時50分発行